說があるが明らかでない。その萬年といふものは伊年を誤認したものでなからうか。

タハラヤドウスケ　俵屋銅輔　→ゼニダセイ　錢田青。

タビ　足袋　藩政の時、士人は冬衣着用の期間に限り白足袋を用ひたのであるが、文久二年の改革により、紺色のものは用ふることを得べく、夏足袋も別に出願を要せず、勝手次第に用ひ得ることになつた。

タヒラ　平等　河北郡金浦郷に屬する部落。元祿十五年までは平ホと書いたが、この時平等と文字を改めた。

タヒラ　平　鳳至郡本郷に屬する部落。永祿三年二月鐵川寺衆徒の訴狀に、『二又川・平等、石動阿彌陀院知行仁候。』となる平等は、今の平である。

ダヒラ　平　鹿島郡別所の内の小字。

ダヒラ　大平　鳳郡久手川の内の小字。

タヒラカネモト　平兼基　鳳至郡東なる八幡寺所藏大般若經建永元年・建暦二年等のものに、願主若山御庄内大谷住平兼基の名が見える。

タヒラツネタカ　平經高　四條天皇嘉禎元年十一月加賀の國司平經高は、白山本宮造營の料米として、一國平均に段米五升を課した。本宮造替の期は嘉祿二年に當つたが、國司その責を盡くさず、遲滯して今に及んだので、經高は自ら造營の功を遂げんが爲、勅許を得てこの事を令したのである。かくて延應元年六月六日上棟の式を擧げたが、幾くもなく八月十七日神主氏盛の宮倉から火を失して類燒した。經高が敬神の念に富み、屢本宮に寄したことは、平戸記に『仁治三年四月六日、今日加賀國白山社御祭也。仍子(經高)並國司、今朝早旦行水、修解除一爲神事。』などゝあるに因つて知られる。公卿補任に據れば、經高嘉禎元年正月を以て近江權守を辭した後、加賀守に任ぜられたことを知る能はぬが、白山宮莊嚴講中記錄に見て、その事のあつたことがわかる。

タヒラトキタダ　平時忠　左大臣時信の子。壽永二年權大納言に任ぜられた。平氏滅亡の後文治元年五月廿日能登に配流の官符を受け、九月廿三日下向して珠洲郡大谷に館したが、五年二月廿四日その地で卒した。年六十。富田景周の說に、『今能登の土人謂ふ。珠洲郡大谷村は時忠卿左遷の地と云ふ。其の末孫として乘定(則定)の宗左衞門と云ふ民の居住の地、卽ち卿の配所の館跡とて今も殘壘等あり。又卿の古墳と云ふも宗左衞門の家側にあり。其の餘卿の遺器とて今存する由也。又卿の支流とて賴兼など名のる者今十有二人あり。是を大谷の十二名と呼ぶ。其の眞贋は六百廿餘年前の事なれば奈何とも言ひがたしといへども、此に併書して來哲の備考とす。寬政三年の春平松時章卿より其の子孫とて和歌を賜はる。其の歌は、在りし世に其のいさをしは大谷や苔の下にも名は朽ちずして。又白檀香を墳墓に手向けはべるとて、ほのかにも烟のうちに立てそひて反さん魂のかをりともなれ。嗚呼此の歌誠に其の先祖を追悼するの志感慨淺からず。』とある。その墓蹟といふものは、固より確實でなく、時章が和歌を贈つたことも津幡の爲廣塚と同日の談である。

タヒラトモノリ　平知度　清盛の子。壽永二年源義仲討伐の軍に從ひ戰死した。越登賀三州志に、『知敎(度)の墳河北郡津幡の北に在り。今里人平谷といふ。又一說に、能州二宮邊水白に塚あり。土人云ふ。是參河守知敎の塚にて、知敎此の土にて戰死すとなり。可參考。』と記する。源平盛衰記倶利伽羅合戰の條平軍部署の中に知度を搦手志雄口の裨將としてゐるに拘らず、次いで敗軍の爲追手倶利伽羅口で自殺したとするは矛盾であるが、保暦間記にも礪波山方面で死んだとするから、初の搦手の諸將中に名を列したのが誤かも知れぬ。併し平谷がその塚であるか否かは明らかでない。水白の塚といふものは、志雄口以遠であるのみならず、それは考古學に言ふ古墳であるから、全く問題にならぬ。更に源平盛衰記平氏侍共亡ぶる事の條には、知度を篠原合戰の後並松附近で矢傷の爲討死したとも書いて、その混沌さを加へてゐる。

タブセゴンノスケ　田伏權之助　越前侯松平忠直の嬖臣。元和九年忠直が豐後の萩原へ謫せられた時、權之助は秋元左馬助と共に、幕府から前田利常に預けられて能登七尾に配流となり、合力米を受けてゐたが、寬永三年同所にて病死した。其の子監物亦合力七十五石を受け、承應三年同所で死し、監物の嫡子吉之祐寬文四年加賀藩に仕へ、その末孫は寶暦四年に斷絕した。監物の二男覺左衞門も召出されたが、これは子孫永續した。三男久米之助は寬永十八年前田利常の小々將となり、十九年新知五百石を賜はり、後正保三年より七尾に居住を命ぜられ、寬文三年金澤に移り、御馬廻・大小將等に班し、九年七月二日歿。子孫天明五年に至つて斷絕した。

タブセヨシトモ　田伏義知　通稱七丞・小左衞門。文化七年父久左衞門の遺知百石を受け、內作事奉行・兼外作事奉行・江戸御廣式御用達に歷任し、天保九年五十石を加へ、十三年致仕して遊翁と稱し、十人扶持を受けた。

タフダヤトクエモン　任田屋德右衞門　陶工で、粉雲堂梅閑と號した。寬政四年金澤に生まれ、文化四年春日山窯に於いて木米に製陶を習ひ、後民山窯に入り、師風に倣つて赤畫の細描を成し、且つ金彩を使用した。明治六年歿、八十二歲。

タフダヤトクジ　任田屋德次　金澤の陶畫工。少時より技を父德右衞門に學び、天保の頃には金澤の業界の牛耳を執つた。慶應三年加賀藩が卯辰山を開拓し、山上に陶窯を作つた時、德次に監督せしめたが、後廢藩に及んで自營し、向山燒と稱して作品を發賣した。

タヘイジ　太平寺　→タイヘイジ　太平寺。

タベゾメ　食初　藩政時代に、嬰兒生まれて百二十日に當る時は、蝶足又は猫足の本膳に赤飯等を盛り、初めて之を哺せしめて祝するをいうた。

タマガハチヨウ　玉川町　→コヅカチヨウ　小塚町。

タマガハトモカツ　玉川知雄　通稱猪太夫・七兵衞。元祿六年奧村丹後守の與力として召出され、百石を受けて公事場御用を勤め、享保五年五十石を引足し、十七年三十石を加へ、組外に列し、前田重熙の抱守に任じ、延寶四年七十石を增し、明和二年八月二十日八十九歲を以て歿。子孫相繼いで藩に仕へる。

タマガハナリカタ　玉川成方　通稱小源太・孤源太・七兵衞。明和二年養父七兵衞知雄の遺知二百五十石を襲ぎ、組外から御馬廻に轉